
ソーシャリー・エンゲイジド・アートにおける芸術の政治性

平井菜穂(京都工芸繊維大学)

近年、美術批評や美学において、社会や政治に対するなんらかの働きかけを企図する「ソーシャリー・エンゲイジド・アート〔社会関与型芸術〕」(Socially Engaged Art、以下SEAと略す)が声高に議論されるようになってきている。SEAについての議論の多くは、実際の社会や政治において作品がどのような有用性を持つのかを重視する傾向にある。だが、美術史家クレア・ビショップはこうした論調を批判し、SEAを、芸術作品として美的=感性的に分析することが極めて重要であると述べている。また哲学者ジャック・ランシエールは、芸術が政治と同じ目的を持つのであれば、芸術は、独自の存在意義を失い自らを消去するはめに陥ると指摘している。本発表は、ビショップやランシエールの言説を手がかりにしながら、芸術が、たんなる社会運動や政治的発言と同化することなく、あくまでも芸術としてどのように社会や政治に関与しうるのか、また、そのような仕方に関与することにどのような意義があるのかを考察しようとするものである。

まず、SEAのなかに、現実の課題の解決を図る実践(アクティヴィスト型)と、課題解決を直接目指してはいない実践(非アクティヴィスト型)の二つのタイプがあることに注目したい。前者は、貧困層のためのコミュニティを実際に形成していくリック・ロウの《プロジェクト・ロウ・ハウス》のように、芸術という領域を超えて社会に具体的に寄与するものとして賞賛されてきた。これに対して後者は、現代の中東の紛争地域の若者を、アメリカの大恐慌時代の小説に描かれたダンス・マラソンという奇怪な競技に没頭させるフィル・コリンズの《彼らは廃馬を撃つ》のように、なんらかの政治的背景を暗示しながらも、曖昧で虚構的な表現に留まり続ける。そこでは作家は、自らの政治的な立場をけっして明確にはしない。だが、作品を観る者の想像力の働きは、そのような曖昧さや虚構性のゆえにかえって刺激され、フィクションの悦楽と現実の苦悩のあいだを往復しながら変化していくこととなる。

本発表では、アクティヴィスト型と非アクティヴィスト型の実践を比較したうえで、後者の作品における曖昧さや虚構性や、エキセントリシティやばかばかしさのなかからこそ、芸術という領域においてのみ発揮されうる独自の政治的な「力」が生み出されることを明らかにしていく。アクティヴィスト型の実践においては、芸術が、社会的有用性のためのたんなる道具と化してしまう危険がある。それに対して非アクティヴィスト型の実践は、そのような危険を避け、ものごとの見え方や感じられ方の地平そのものを変えていく。そのような変化をとおして、既存の社会に染みついているものごとの感じ方による支配から逃れ、そうした支配に抵抗する力が醸成されていく。芸術に独自のこの感性的な「抵抗力」が、どのような質の政治性を持つかが議論の鍵となる。